

善き生とアクラシア

横田幸也（人間学コース）

（指導教員：堂園俊彦）

キーワード：アリストテレス、マッキンタイア、アクラシア、善き生

序論

われわれは「そうすることが善いと知っていて、そうすることができるはずなのに、そうしない」ということを日常的に経験する。アリストテレスはこの現象を「抑制のなさ（アクラシア）」と呼び、悪徳の一つとした。ある行為をアクラシアなものであると判断するために、われわれは何が善いのかを分かっている必要がある。しかし、善さを自明視することはできるのだろうか。本論文では現代における善き生とは何か、それと共に、アクラシアとは何かを、アリストテレス、さらには、アリストテレスを現代に復興することを提案するアラスデア・マッキンタイアの議論を参考に考察していく。

第一章 アクラシアという悪徳と善き生

第一節 アクラシアは存在するのか

果たして、自覚しながら自らにとって害悪をなす行為を行うことは可能なのだろうか。この観点からアクラシアを否定したのはソクラテスである。ソクラテスにとって徳は知識であり、絶対的な力を有するものであった。そのためソクラテスは、「悪と知りながらそれをしてしまう」というアクラシアを認めない。アクラシアを嘆く人は、本当は知らないのである。これに対してアリストテレスは、ソクラテス同様、知を人間特有の能力であるとして評価する一方で、アクラシアの存在を認める。ソクラテスの教説は、彼が「知ること」と「行う」ことを同じ事柄として受け止めていたということに基づいている。しかし、人は常に正しい知識に基づいて行為を行うとは限らない。行為者が持っているものが知識ではなく思い込みであったとしても、アクラシアの問題は生じるのである。知と無知の二分法を用いて行為という複雑な現象を論じるソクラテスのアクラシア否定は不十分であると判断せざるをえないだろう。

第二節 アクラシアという悪徳

アクラシアの最初の考察はアリストテレスの『ニコマコス倫理学』第七巻に見られる。ここでアクラシアは、自制心（エンクラテイア）という好ましいエートスに対する悪徳として位置づけられた。例えば、ある個人が「甘いものは身体によくない」、「甘いものは美味しい」という二つの対立する推理判断を持っているとする。この時彼の心に、甘いものを食べ

ることによって得ることのできる快を味わいたいという欲望が生じると、その力の強さゆえに欲求に基づいた推理判断を選択してしまう。これがアクラシアの原因である。アリストテレスは、このように決定された行為は、最善の生き方であり、行為の最終目的である「幸福」への歩みを阻害するものであるとしてアクラシアを悪徳と定義したのである。

第三節 いかにして生きるのが最善か

では、アリストテレスにとって最善な生き方とはどのようなものだったのだろうか。彼は、人々の見解（エンドクサ）を頼りに、以下の二つの生き方を最善の生とする。すなわち、人間特有の機能（エルゴン）である理性（ロゴス）に基づいた生と、神と共有されるような活動、すなわち哲学的観想（テオリア）の生である。これらの分別ある見通しをもった最善の人生を送ることが、行為及び人間にとっての目的であるとアリストテレスは考えている。

第二章 道徳と目的

第一節 アリストテレスにおける二つの善き生—行為の目的とは—

アリストテレスが生き方について考えるとき念頭に置いていたのは、われわれ人間が目指すべき目的である。その目的とは「幸福（エウダイモニア）」であり、これを目指す生が善き生である。善き生とは、前述した理性に基づく行為の生と哲学的観想の生だが、タイプの違う二つの最善な生き方の間には対立があるようにも見える。決定的に人間的な生の理想とそれよりも要求の厳しい「高度な」理想との対立である。

第二節 二つの善き生の関係

二つの理想的な生き方の対立について、アリストテレス自身は明確な答えを示してはいない。この点に関して踏み込んだ考察を行っているのは、ジョン・L・アクリルである。彼の解決策とは、道徳の目的そのものがテオリアの促進にある、と解釈するものである。この体系では、善い行為とはテオリアを促進する傾向を持っている行為にはかならない。彼の言う通りならば、二つの善き生の間にはいかなる対立も起きることはない。道徳がテオリアを促進するという考えは奇妙に聞こえるかもしれないが、われわれが道徳規則を適用し、倫理的な徳を実行するのは、そのような規則や徳を正当である

とみなす成員を持つ社会こそが、テオリアが栄える機会に最も恵まれるだろうと考えるからである。しかし個人主義が広く受け入れられている現代において、こうした生き方が紛れもなく最善なものであると確信することは困難である。

第三節 近代における道徳的破局—道徳になぜ目的論が必要か—

前節においてわれわれは個人主義の観点から目的論を批判した。しかし個人主義自体にも問題は存在する。この問題を、道徳上の見解の不一致という観点から批判したのが、A・マッキンタイアである。彼はそうした不一致を、道徳的破局とするが、彼がその原因と見なすのが情緒主義である。情緒主義とは、道徳判断は合理的に説明することができず、それらは究極的には個人の選考や態度、感情の表現にほかならないとするものである。このような思想の下においては、どのような道徳的態度をとるかについて万人に共通な基準はなく、各々が好き勝手に自らの価値観に従って道徳を解釈するのである。多様な価値観を認め、個人の自律や選択を尊重した結果としてわれわれはアリストテレス的な目的論を手放してしまった。自分の選好で選んだ目的のみに価値を見出す個人的・主観的な見解では、選択されたもの以外の事柄に何の価値も見いだせなくなるのではないだろうか。このような世界で、一体どのような生き方が善き生であるということができのだろうか。

第三章 現代における善き生とアクラシア

第一節 マッキンタイアにおける目的論の再構成

個人主義が深刻な問題を抱えているとすれば、われわれはどのようにすればよいのだろうか。マッキンタイアはここで再び、目的論を提唱する。しかも彼の目的論は、アリストテレスの構造を継承しながらも、現代により適応するものであるゆえに、注目に値する。彼の目的論において特徴的なのは、人生を物語として捉え、その統一性を完成させることをわれわれの目的、すなわち善とする点である。「私にとっての善とは何か」と問うことは、私が自らの統一性ある人生を生き抜き、完成させるにはどうすることが最善か、を問うことであるとマッキンタイアは述べる。この議論に従えば、人間にとっての善き生き方とは、人間にとっての善き人生を探求して生きるということである。

また、マッキンタイアが強く主張することは、共同体の尊重である。われわれはただの個人として善を求め、諸徳を実行することはできない。人生を物語と捉える上で、生まれや所属する共同体を舞台として捉える彼は、共同体における他者の存在や周囲の環境を重要視するのである。

第二節 善き人への歩み アリストテレスの場合

マッキンタイアが述べる善き生を送るにはどのようにすればよいか。この問題を考える上ではアリストテレスにおける善き生に関するパーニェトの考察が参考になる。彼によれば、善き人となるためには生まれと、美しい習慣による躰、

そして美しく正しい行為を自ら学ぶこと、すなわち習熟が必要とされる。そしてそれらの過程を経て、徳を学ぶ素養ができた人物が、実践知を備えた善き人物から教育を受けることにより、彼自身も善き人物へと成長するのである。また、このような徳ある人物の行為は常に幸福なものである。自ら善いと分かっていることを愛し、そこに適切な快を見出す彼は、アクラシアに陥ることがないのである。

第三節 現代においていかにして善き生を送ることができるか

アリストテレスの目的論では、人間本性に関して明確なものが存在したが、近代では多様な価値観が認められている。彼の目的論をそのまま現代に適用することは難しい。マッキンタイアの目的論は、アリストテレスのもの比べると、われわれの生活に馴染むだろう。しかしマッキンタイアの理論に対しても批判が寄せられている。彼は、われわれが物語を紡ぎだす舞台として小共同体の復活を強調するが、これに対しては、時代錯誤な主張であると批判も受けている。このように考えると、アリストテレスやマッキンタイアの目的論を現代において採用することは容易ではない。

しかし、彼らの目的論を完全に放棄することも望ましいことではない。思うにわれわれに求められていることは、過去を再現し、忠実に受け入れるのではなく、常に変化する時代の流れを汲みながらその時の社会に応じてシステムを構築することなのではないだろうか。結局、目的の多様化を認めるわれわれの社会での善き生とは、個人の自己実現を達成するように生きることであろう。勿論、ただ個人としてだけの自己実現の追求は危険である。善き生の追求は公共の福祉や、他者の利害との均衡も考慮し行うべきである。また、多様な目的や幸福が認められるからこそ、アクラシアに関しても多様性が認められると考えられるのではないだろうか。アクラシアから生じる問題の解決とはならないが、時代と環境が変化した今、われわれにとってアクラシアは当時のギリシャで悪徳とされたほどに深刻なものではなくなっているのかもしれない。

結論

本論では、現代においてどのように生きることが善いのかをアリストテレス、マッキンタイアの議論を見ながら論じてきた。しかし、アクラシアという複雑な現象に関しては単純な分析から明確な解決や解釈を導くことはできず、十分な議論ができなかった。この点は今後の課題としたい。

主要参考文献

- アラスデア・マッキンタイア(1993)『美徳なき時代』篠崎榮訳 みすず書房。
- ジョン・L・アクリル (1985)『哲学者アリストテレス』(藤沢令夫/山口義久訳)、紀伊國屋書店。
- アリストテレス (1973)『ニコマコス倫理学』(高田三郎訳)、岩波書店。